

# 留学支援としてのEポートフォリオの活用

—GGJ採択5大学の取り組み例より—

## E Portfolio for Studying Abroad Support:

Findings Based on an Interview Survey in 5 Universities Adapted

by Go Global Japan

神戸大学大学院国際協力研究科研究員 杉野 竜美

SUGINO Tatsumi

(Researcher at the Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University)

キーワード：ポートフォリオ、留学支援

### 1. はじめに

グローバル人材育成が求められる中、大学は日本人学生の留学支援体制を整備することが求められ、様々な国際プログラムを展開している。そして、語学研修、ブリッジ型プログラム、インターンシップ、ボランティアなどの国際プログラムの海外学修体験を評価する基準において、その評価はアウトプット型評価からアウトカム型評価へとパラダイムがシフトしている<sup>1</sup>。このようなアウトカムを重視する評価において、Eポートフォリオは学生の成果分析のツールとして着目されている。

本稿では、留学プログラムにおいてEポートフォリオを利用している5大学の事例から、留学支援ツールとしてのEポートフォリオの有効な活用とそのための重要な点について検討する。留学支援におけるEポートフォリオは、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（以下、GGJと記す）」事業を契機に増加している<sup>2</sup>。しかし、はたして留学を含む国際プログラムにおいて、Eポートフォリ

<sup>1</sup> 芦沢真五（2012）「国際プログラムの学習成果分析とEポートフォリオ：海外学習体験の質的評価の将来像」『留学交流』2012年11月Vol. 20。

<sup>2</sup> Eポートフォリオのコンテンツ「manaba」を提供している（株）朝日ネットへのインタビューで「GGJをきっかけに導入された大学が17大学ある」との回答を得ている（2014年12月24日関西学院大学上ヶ原キャンパスGGJ会場にて）。これ（17大学）は、GGJ採択校（42大学）の約40%に相当する。また、事例E大学の担当者が「GGJに採択された時に、各社からEポートフォリオの売込みがありました。」と述べていることから、GGJを期にEポートフォリオを提供する企業の営業活動が活発になり、

オは有効に活用されているのだろうか？有効に活用するためには何が重要なのだろうか？GGJに採択されている5大学の留学担当者へのインタビューをもとに、Eポートフォリオの利用状況、直面している課題から、今後の有効な活用と重要な点について検討する。

## 2. ポートフォリオ概要

近年、大学で利用されているポートフォリオは、コンピュータを用いたEポートフォリオが主である。ポートフォリオとは、学修実践記録の総体である。実践記録とメンタリングによって「何を」「どのように」学修したのかを省察し、さらなる学修または目標達成へとつないでいくものである。この基本的構成は、従来の紙媒体のポートフォリオでも、コンピュータを用いたEポートフォリオでも変わらない。本稿では、「Eポートフォリオ」と記す。

評価方法としてのEポートフォリオとは、学習者である学生自身が自らの学修過程や成果に関する情報を継続的に収集し、それをもとに学修の程度を自己評価し、次に進むべき課題を見出すことを目的としたものである（(財)大学基準協会2009、20頁）。大学教育においては、成績評価を改善する具体的な方策として期待されている（中央教育審議会2008、27頁）。

Zubizarreta (2008) は、Eポートフォリオの基本的構成として「記録・証拠資料 (Documentation / Evidence)」「省察 (Reflection)」「共同作業／メンタリング (Collaboration / Mentoring)」を挙げている。これらを、一連作業として捉えることで、Eポートフォリオは有益に活用される。

## 3. 国際プログラムにおけるEポートフォリオの役割

芦沢 (2012) は、国際プログラムの質的評価のためのツールとしてのEポートフォリオについて論じている。大学で多種多様な国際プログラムが実施される中で、「学生が学修体験を通じて何ができるようになったか」というアウトカム重視の評価軸をもつ学修成果分析における、Eポートフォリオの果たす役割として、「a. 組織的な指導」「b. 英語標準テストなど、学生の力を把握」「c. 留学期間中の危機管理」「d. 学習到達度の確認と留学の準備。また、その指導」「e. データの蓄積とその利用」の5点をあげている。つまり、学生の学修活動の一時点（例えば、プログラム修了時や卒業時など）を捉えるだけでなく、国際プログラム全体の有機的な評価として、Eポートフォリオが有効に活用できるのである。

また、諸ステークホルダー（①学生、②教職員、③高等教育機関）の役割と機能について、①学生は、自己の学修記録やデータを蓄積～自己評価し、それをもとに将来の学修計画を作成したり、キャリア形成に活かすことが期待される、②教職員は、インターアクティブな学生指導を行い、教育プロ

---

この時期に導入したケースが多いと考えられる。

グラムについてのフィードバックを行う、③高等教育機関は、Eポートフォリオによって蓄積されたデータの管理、統計、情報共有、評価を通して、機関としての質的向上をはかる、と述べている。

#### 4. 留学支援におけるEポートフォリオの利用状況

##### 4-1. 調査方法・概要

本調査は、国際プログラムにおいてEポートフォリオを利用している国内5大学と、Eポートフォリオのコンテンツを提供している2企業に対してインタビュー調査を実施した。その内4大学（下記A～D大学）と1企業は、2014年12月21日（日）関西学院大学上ヶ原キャンパスにて開催された「Go Global Japan Expo」の会場にてインタビューを実施し、それ以外の大学・企業はそれぞれの所在地にて実施した。

インタビュー調査は、ある程度同じ項目を尋ねる形で、かつ自由に発言してもらおう形で行い、半構造化インタビューと自由発言の中間的な調査方法を取った。

調査を実施した大学は、次の通りである。

- A大学：国立大学、全学推進型GGJ、2013年4月Eポートフォリオ導入
- B大学：国立大学、特色型GGJ、2013年4月Eポートフォリオ導入
- C大学：私立大学、特色型GGJ、GGJ採択後Eポートフォリオ導入
- D大学：私立大学、特色型GGJ、2014年秋Eポートフォリオ導入
- E大学：私立大学、全学推進型GGJ、GGJ採択後Eポートフォリオ導入

##### 4-2. 調査大学の国際プログラムにおけるEポートフォリオ利用状況

###### ● A大学の利用状況

A大学は、全学推進型GGJに採択され、グローバル・リーダー育成を狙いとしたプログラムに取り組んでいる。交換留学や海外短期研修では、それぞれ単位認定制度を導入している。A大学は、GGJ構想調書にもEポートフォリオの利用について記しており、利用開始は2013年4月からである。ただし、全学的にはGGJ以前から導入されており利用していた。さらに以前には工学部がいくつかの授業の中で利用しており、独自の方法を展開していた。このように大学内でEポートフォリオの経験が蓄積されていたが、GGJプログラムで利用するEポートフォリオの準備には時間と労力を要した。具体的には、ワーキンググループ（5～6名）を編成し、ルーブリックの内容を詰めることに1年を費やした。そして、1年間の試運転の間にデータを取り、その後本格的に始動させた。

GGJプログラムでは、参加する学生1名に対してアドバイザー1名を配置している。このアドバイザーシステムは、工学部が実施してきた方法を踏襲したものであり、学生と教員が目標達成度について定期的に確認するものである。また、「目標達成シート」を利用して、学生自身の省察の機会を設定している。

学生のEポートフォリオの利用は、高い学生と低い学生が混在している。学生のアクセスを増やす対策として、留学、その他に関する情報提供をEポートフォリオ上で実施している。また、海外短期派遣プログラムにおける事前授業で提出を課されるレポートをEポートフォリオ上で提出させ、学修記録の蓄積を可能にしている。このような学修記録の築積は、後の省察を促す目的ももっている。

Eポートフォリオ上で学生同士の交流を図るために「コミュニティ機能」を設置しているものの、学生はLINEなどを利用して交流をはかっており、この機能はあまり利用されていない。「コミュニティ機能」だけでなく、Eポートフォリオへのアクセス数が少ない学生もいる。あまり利用していない学生には、呼びかけなどの対処を行っている。A大学では、学生のアクセスを徹底することを目下の課題と考えている。

### ● B大学の利用状況

B大学は、特色型GGJに採択されており、国際的視野を持ったアグリバイオリダーの人材育成に取り組んでいる。交換留学では単位認定制度を導入しているが、語学研修プログラムでは単位の認定はない。B大学がEポートフォリオを導入したのは、GGJに採択された2012年である。導入後、準備期間に半年を要し、2013年4月から実際に利用している。プログラムでは、語学習得や専門分野に関連する短期留学、英語力アップのためのプロジェクトが実施されている。大学からの情報発信としては、オリエンテーションやセミナー（就職セミナーも含む）の開催に関する情報提供、課題の提示などに利用している。新情報は、学生のメール宛に連絡が入るように設定されており、メールで連絡を受けた学生がEポートフォリオへアクセスするように仕向けられている。

学生の課題提出、英語力アップに関連する受講記録や評価記録もEポートフォリオに蓄積され、これらの学生の状況を主に教員が把握し、管理している。学生の成長に向けて、教員がアドバイスを提示するシステムになっている。そして、学生が留学する際に、英語力アップのプログラムの情報を利用できるようになっている。

学生のEポートフォリオへのアクセスに関しては、初期の段階では敬遠する学生もいる。職員は、学生のアクセス状況についてシステム上で把握出来るので、利用していない学生に対して、メールで利用を促している。また、留学前にはEポートフォリオを通してやり取りする習慣をつけ、留学時には十分に利用できるようにしている。しかし、学生の利用を浸透させることが困難だと担当者は感じている。

現在の課題は、昨年度に比べて今年度になって留学する学生が減少したことである。この減少について思い当たる理由はないとのことだった。現在は、説明会の開催や声掛けなどで対処しているところである。

### ● C大学の利用状況

C大学は、特色型GGJに採択され、学部・大学院を連携させて、情報科学を基礎としたグローバル

人材の育成に取り組んでいる。交換留学や海外短期研修では、それぞれ単位認定制度を導入している。C大学もGGJに採択されて、留学支援に関する分野でEポートフォリオを導入した。C大学では、それ以前から、全学・正課授業で同じコンテンツのEポートフォリオを利用していた。この以前から利用していたコンテンツに、GGJのプロジェクト独自の到達度認定を盛り込んでいく形でEポートフォリオを作成したので、準備に多くの時間を要しなかった。

C大学の海外インターンシッププログラムは、学部の授業とは別のプログラムであるが、「事前授業+海外インターンシップ+事後講義」を経て単位が認定される。海外インターンシップに向けて、学生の英語力、専門分野に適したインターンシップのマッチングを行っている。

Eポートフォリオでは、外国語の受講履歴、受験履歴や成績、海外渡航履歴、授業の出席などの記録、インターンシッププログラム独自の到達度認定に利用している。また、インターンシップに派遣された学生は、定期報告（月1回）や課題提出を行い、教員との連絡を取っている。業務報告以外にも、生活面での相談などについても利用している。学生（15名）の報告に対して、1名の教員が指導の一環として担当し、コメントを返している。「インターンシップにおける学生の学びは、企業の報告を通して把握しているが、Eポートフォリオの利用によって実情がよく把握できる」と担当職員は述べている。

課題としては、GGJが2年後に終了するため、このプロジェクトを事業として自立化していく必要があり、正課授業へ移すことを予定している。それにあたって、Eポートフォリオには学生の学修状況、進路、就職、スキルなどの情報が蓄積されているので、これらをエビデンスとして提示し、改革へとつなげていきたいと考えている。つまり、C大学のEポートフォリオは、学生の学修成果の蓄積だけでなく、大学改革に向けた資料の蓄積としての役割を担っている。

## ● D大学の利用状況

D大学は、特色型GGJに採択され、外国語学部と理系3学部が共同して大学全体のグローバル化をけん引することを目指したプログラムに取り組んでいる。交換留学や海外短期研修では、それぞれ単位認定制度を導入している。D大学が、学生に向けて本格的にEポートフォリオを稼働したのは2014年秋である。Eポートフォリオを稼働するまでの準備期間は1年半であり、本調査対象の大学の中でも比較的時間をかけている。導入にあたって、教職員（3学部各1名ずつ計3名の教員と、職員2名）の勉強期間を取り、「Eポートフォリオとは？」という段階から始まり、特にルーブリックの開発に非常に時間を要した。アメリカ留学経験があり、その時にEポートフォリオを利用していた職員を中心に、ルーブリックの開発やシステムの整理を行った。これらの教職員とEポートフォリオ事業を行っている（株）エミットジャパンのノウハウによって、現在利用しているEポートフォリオが出来上がった。

Eポートフォリオの導入の目的は、学生の自律的な学びを促進するためである。その学修支援とし

て、学生は設定された目標に向かってステップを踏んでいけるように設計されており、その学修プロセスをアピールするための証拠資料として成果物をEポートフォリオに蓄積していくようになっている。学生の成果物（写真も可）に対しては、教員がチェックしコメントを返している。また、担当職員が「教員とのインターアクションで、お互いに『よしよし、ここまでできた』ということを確認し合う形で進めていきます」と述べているように、学生と教員の間で学修プロセスを確認し合っている。現在、GGJプログラムに参加している学生は62名、担当教員は3名であるが、学年末の「ふりかえり」セッションに向けて担当教員を増加する予定である。

GGJプログラムの対象は主に理系学部であり、理系学部では長期留学と専門分野を両立して学部の4年間で修了することが困難である。現在GGJプログラムで取り入れている留学は1週間の短期留学であるが、Eポートフォリオの利用を充実させることで（例えば、卒業研究を留学先で実施し単位として認めるなど）、理系学部で長期留学と専門分野の両立を可能にしていきたいと考えている。

### ● E大学の利用状況

E大学は、全学推進型GGJに採択され、「留学型」と「国内型」の2つの教育プログラムを設定し、グローバル・リーダー育成を目指したプログラムに取り組んでいる。交換留学や海外短期研修では、それぞれ単位認定制度を導入している。E大学は、GGJの構想調書にもEポートフォリオについて記しており、採択と同時に導入した。構想調書は、担当部署の職員のほか、ポートフォリオを研究している研究員や教員と共同で作成した。GGJに採択された折、複数の企業からEポートフォリオの売り込みがあり、学内で検討した上で1社に決定した。決定理由は、採用したEポートフォリオが、ある程度フォーマットが出来上がっているため、構想期間が少ない状況でも利用が可能と考えたからである。GGJ採択決定から約6カ月で導入に至った。

Eポートフォリオの導入目的は、主に学生が学修について省察する機会を持つためである。そして、現在は、情報の蓄積として有効に機能している。長期留学の情報提供や出願、留学・奨学金の案内、外部団体の案内、派遣国情報、留学経験者の体験談など、あらゆる情報が一括して入手できるようにプログラムされている。この「一括情報」が学生のアクセスを促すものと考えている。また、他大学同様、課題の提示・提出、語学スコアなどの学修記録、海外留学経験歴の記録にも利用している。E大学が他大学と異なるのは、教員よりも職員の関与が大きいことである。教員の積極的な参加を望んでいるが、Eポートフォリオに理解を持つ教員のみが利用しており、コースによっても教員の参加度は異なっている。学生の利用状況に鑑みると、職員の一方向的な利用にとどまっている。

学生同士の交流の場として「コミュニティ機能」を設定している。しかし、学生はLINEやFacebookなどの利用度が高く、この機能を利用している様子はない。EポートフォリオをSNSと連動させる点については、システム上難しい点がある。Eポートフォリオの利用には、一旦大学パスワードを用いて大学のサイトへ入り、次にEポートフォリオのパスワードを入力する必要がある。つまり大学内部

に位置するEポートフォリオと、大学外部に存在するSNSが連携することはシステム上難しい。

課題としては、学生の利用率を挙げている。新入生オリエンテーションで説明したことでログイン率が上昇しているが、さらなる学生の利用に向けて検討している。

#### 4-3. 5大学の利用状況に関する傾向

インタビュー調査を実施した5大学のEポートフォリオの利用状況に関する傾向をまとめると、「準備期間」「主な利用目的」「教職員によるフィードバック」「学修記録の蓄積」「コミュニティ機能とSNS」「今後の課題」の事項を挙げることができる。

##### 「準備期間」

5大学がEポートフォリオの導入を決定してから実際に利用するまでに要した期間は、半年間（B、E大学）から2年間（A大学）と幅が見られた。企業が提供するEポートフォリオには、ある程度デザインされたコンテンツもあれば、大学独自のコンテンツを開発していくタイプもある。したがって、大学は状況に合わせて、短期間で導入することも可能であり、オリジナル開発に時間をかけることも自由である。導入までに時間を要したA大学とD大学では、ワーキンググループを立ち上げて、独自のコンテンツを開発していた。また、別の学部で、すでにEポートフォリオを利用した経験があることで、導入準備が短縮されたケースもあった（C大学）。

##### 「主な利用目的」

主な利用目的は、学びや活動の省察・自律的な学びの促進といった学生の学修支援に加えて（A、C、D、E大学）、学修成果の蓄積を学部改革へと導く資料として利用する大学（C大学）もあった。また、留学や奨学金に関する情報、留学経験者の体験談などの情報を提供していた（A、B、E大学）。

##### 「教職員によるフィードバック」

学生の自律的な学びを促進するという点から、すべての大学でフィードバックが行われており、その主たる担当者は教員が担っている大学が多かった（A、B、C、D大学）。フィードバックは、学生の活動に対するコメントだけでなく、目標設定に向けた現段階の状況を学生と教員がともに確認（＝メンタリング）している大学もあった（A、C、D大学）。

##### 「学修記録の蓄積」

Eポートフォリオに蓄積しているものとして、課題のレポート提出、英語テストの成績、受講記録などが挙げられていた（A、B、C大学）。GGJプログラムと正課授業の単位互換を行っているC大学は、正課授業の出席記録もEポートフォリオで管理していた。具体的な蓄積物を確認できなかったD大学でも、ルーブリック方式で学生の成長を確認しており、この記録が蓄積されている。

##### 「コミュニティ機能とSNS」

Eポートフォリオでは、学生の個人ページにアクセスできるのは、基本的に本人と教職員である。また、設定によっては他学生と交流・共有することも可能である。例えば、A大学とE大学では「コ

「コミュニティ機能」という設定を利用して、学生同士および教職員との交流の機会を提供している。しかし、どちらの大学でも、「コミュニティ機能」はあまり利用されていないという。その理由として、LINE や facebook といった既存の SNS を学生たちは頻繁に利用しており、あえて「コミュニティ機能」を必要としていないことが挙げられていた（A、E 大学）。A、E 大学以外にも SNS と E ポートフォリオを連携させている大学はなく、D 大学が「検討中」と回答したのみであった。

### 「今後の課題」

今後の課題は、学生のアクセスを徹底することや（A、B 大学）、学生の利用度をアップする（E 大学）といった学生の利用に関する回答が見られた。また、E ポートフォリオを利用して留学と専門分野を両立させるといった利用法に関するものや（D 大学）、GGJ プログラムを正課授業に組み込み学部改革へと発展させることを課題として挙げている（C 大学）。

## 5. 留学支援における E ポートフォリオの有効な活用と重要な点

以上の調査結果を踏まえて、留学支援における E ポートフォリオの有効な活用と重要な点についてまとめよう。

A、B、E 大学があげていた学生のアクセスに関しては、E ポートフォリオを利用する上で不可欠な課題である。Zubizarreta (2008) が E ポートフォリオの基本的構成の一つとしてあげている「記録・証拠資料 (Documentation / Evidence)」は、学生がアクセスしてこそ、学修やプロセスの記録が蓄積されるからである。また、芦沢 (2012) が述べているように、ステークホルダーとしての学生は、学修記録を蓄積することで自己評価を可能にし、将来の学修計画やキャリア形成に活かすことができるのである。学生のアクセス向上をはかる上で、国際プログラムが「全学的（例えば、GGJ「全学推進型」）取り組み」か「部局的（例えば、GGJ「特色型」）取り組み」なのかで状況は異なってくるだろう。学生のアクセス率が低い場合、母数の大きい「全学的取り組み」の方が、その実数は高くなるだろう。A、B 大学はアクセスの少ない学生に対して声かけを行っているが、それが多数になれば困難なものになるだろう。全学的に国際プログラムに取り組んでいる場合、担当部局の職員だけでなく、各学部と連携体制を整えて（利用して）対処することが重要であろう。担当部局と各学部の連携を重視することは、各学部の教員の積極的な介入を必要とする。これは、芦沢 (2012) が述べている「教職員の役割と機能」を再確認する機会となるだろう。

E ポートフォリオの基本的構成の一つ「共同作業／メンタリング (Collaboration / Mentoring)」は、フォーマルな場面とは別に、日常のカジュアルなコミュニケーションも含んでいる。C 大学の職員はインタビューの中で「学生は、生活面に関してよく伝えてくる。何で困っているのかなど、実際に近くにいるわけではないが、彼らの実情をよく把握できる」と語っていた。E ポートフォリオを通して、海外で暮らす学生の日常や悩みを把握し対応するといった、日常的コミュニケーションをはか



っていたのである。海外で生活をしながら学んでいる学生は、何らかの不安・悩み・問題を有しているものだ。小さな不安や悩みは、自己解決できるものもあれば、大きな問題へと発展する場合もある。後者の場合、学修だけでなく、留学そのものを継続できなくなることもある。したがって、学生の日常的な小さな不安や悩みを把握して、それに対処するということは、留学している学生の学修環境整備であるのと同時に、大きな問題への発展防止という危機管理対策としても機能するのである。

このカジュアルなコミュニケーション・ツールとして、SNSとEポートフォリオの連携について取り上げよう。Eポートフォリオでは、「職員と学生」「教員と学生」のコミュニケーションをはかることができる。これに加えて学生同士のコミュニケーションも可能になれば、学生の不安や悩みを解消する機会が増える。そこで、「コミュニティ機能」を設定することで全ステークホルダー間のコミュニケーションが可能になる<sup>3</sup>。しかし、本調査では、「コミュニティ機能」がある場合でも、それが学生たちに利用されていないことがわかった。その理由は、学生同士では、既存のSNSを利用してコミュニケーションをはかっているからだ。ならば、そのSNSとEポートフォリオを連携させれば、留学中の生活と学修の様子が把握できるのではないだろうか。北米ではEポートフォリオを既存のSNSと連動させている例もある。また、Eポートフォリオのコンテンツを提供している企業O氏によれば、日本でも技術的に可能であるとのことだった。留学中の危機管理対策として、EポートフォリオとSNSの連携を勧めたい。

## 6. おわりに

前項冒頭にて、担当部局と各学部の連携について述べた。担当部局だけでなく、学部、そして教員の積極的な参加が、学生のアクセス・利用向上につながるからである。しかし、これはシステムを導入する以上に実現が困難な場合もある。それには特定の職員や教員だけの問題ではなく、各大学、各学部の文化も関係するからだ。つまり、大学や学部の文化と融合するかたちで各関係者の理解を高めていくことが必要だと言える。

続いて、EポートフォリオとSNSの連携について論じた。この連携は、Eポートフォリオの機能としては不可能ではない。しかし、必ずしも容易ではない。E大学では、Eポートフォリオへのログインの前に、大学のシステムにログインするという。つまり、Eポートフォリオと大学の外部にある既存のSNSが連携するというのが難しいという、大学のセキュリティシステムに関連する困難さについて述べていた。Eポートフォリオの活用の可能性を拡大するためには、大学のシステム上の問題も考慮する必要があるのだ。

<sup>3</sup> 本調査対象大学では、A、E大学のEポートフォリオに「コミュニティ機能」が設定されている。（「コミュニティ機能」の設定は導入時に限られているかもしれないので、具体的に導入を検討している方はEポートフォリオのコンテンツを提供している会社に問合せいただきたい。）

本稿のおわりに、Eポートフォリオでは「記録・証拠資料」「共同作業・メンタリング」「省察」の有機的な作用が重要であることを再度強調したい。学生のアクセス・利用は「記録・証拠資料」の蓄積という意味で重要である。しかし、蓄積するだけでは不十分である。学生のアクセス・利用の向上という課題の先には、「メンタリング」と「省察」を通じた、学生の学修改善、留学の質改善がある。これを、学生、教員、職員が十分に理解し、活用することで、Eポートフォリオの有益性は高まる。そのためには、教員、職員といったすべてのステークホルダーの積極的な参加や合意があり、部局と学部の横断・連携といった大学組織のあり方を再確認することも重要だと考える。

付記：本稿は『大学教育研究（23）』『学修支援と高等教育の質保証』に掲載された論稿を加筆・修正の上執筆したものである。

### 【引用・参考文献】

- 朝日ネット「manaba」 <http://manaba.jp/>（2015年10月18日閲覧）
- 芦沢真五（2012）「海外学習体験の質的評価の将来像（連載「国際プログラムの学習成果分析とEポートフォリオ」第1回）」ウェブマガジン『留学交流』2012年11月号、Vol.20、pp.1-7。  
<http://www.jasso.go.jp/about/documents/ashizawashingo.pdf>（2015年10月18日閲覧）
- 小川賀代、小村道昭編著（2012）『大学力を高めるeポートフォリオ：エビデンスに基づく教育の質保証をめざして』東京電機大学出版局。
- 杉野竜美（2014）「大学生の留学支援におけるラーニング・ポートフォリオ活用の可能性」『大学教育研究』第23号、pp.89-102。
- 杉野竜美（2015）「大学生の留学送り出し支援におけるプロセス評価：ラーニング・ポートフォリオ活用の可能性」山内乾史編著『学修支援と高等教育の質保証』学文社、pp.117-143。
- 大学基準協会（財団法人）（2009）『平成20年文部科学省大学評価研究委託事業 内部質保証システムの構築－国内外大学の内部質保証システムの実態調査－』2009年3月。
- 中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて（答申）』平成20年12月24日。
- 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会（2008）『学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）』平成20年3月25日。
- 土持ゲーリー法一（2009）『Eポートフォリオ：学習改善の秘訣』東信堂、pp.164-190。
- Zubizarreta J. (2008), "The Learning Portfolio: A Powerful Idea for Significant Learning," IDEA Paper #44, Individual Development and Educational Assessment Center, 2008.  
[http://ideaedu.org/wp-content/uploads/2014/11/IDEA\\_Paper\\_44.pdf](http://ideaedu.org/wp-content/uploads/2014/11/IDEA_Paper_44.pdf)  
(2015年10月18日閲覧)